

学習院大学言語共同研究所紀要
第 13 号 (1990)

Bulletin of the Language Institute of
Gakushuin University, No. 13 (1990)

学習院大学言語共同研究所
東京・目白 1990

朝鮮語のオノマトペ

——擬声擬態語の境界画定，音と形式，音と意味について⁽¹⁾——

野 間 秀 樹

1. 擬声擬態語の画定

1-1. 擬声擬態語と音象徴語

外界の音や動物の鳴き声などを言語音によって写した 꼬끼오 [ʔko-ʔkio] (こけこっこー：にわたりの鳴き声) などの一連の単語を擬声語とし，音のしないものごとのようすをあたかも音のするごとくに言語音によって描写する 무럭무럭 [murɔŋmurɔk] (すくすく：生物が勢いよく育つさま) などの単語を擬態語とする．それらを併せて擬声擬態語もしくはオノマトペと呼ぶことにする．このほかに，言語音によって言語外の現象を象徴する，빨갳다 [ʔpalgaʔtʰa] (鮮やかに赤い)/뽀갳다 [ʔpɔlgaʔtʰa] (鈍く赤い) などの語音象徴語，もしくは音象徴語と呼びうる一連の単語が朝鮮語には豊富に存在するが，そうした音象徴語は擬声擬態語と区別して考えることとし，本稿では扱わない．

1-2. 擬声擬態語の境界画定

朝鮮語においてどの単語がオノマトペに属するものであるかについては，母語話者はおおむね一致した見解を持つ．しかし厳密な画定となると非常に難しい．一般語と擬声擬態語，音象徴語と擬声擬態語，擬声語と擬態語のいずれにも境界的な単語群が存在する．

例えば 잔뜩 [ʧanʔtuɾk] (どっさり，いっぱい) や 더부룩하다 [ʧɔburukʰada] (ぼうぼうだ：草や髭がたくさん生えているさま)，아리송하다 [arisonʰada]/알쏭달쏭 [alʔsonʰdalʔson] (あやふやだ：記憶などが) などは一般語なのか擬声擬態語なのか母語話者でも判断に迷うところであり，個人差が認められる．形容詞 조용하다 [ʧɔjoŋ-hada] (静かだ) は擬態語と考えられないのが普通だが，조용 [ʧɔjoŋ] のように形容詞接尾辞 -하다 がとれて副詞的になったり，조용조용

[tʃojondʒojon] のように疊語形式になると擬態語と感じられもする。울다 [u:lɔda] (泣く) の派生と思われる 울먹울먹 [ulmɔgʌlmɔk] (泣きそうなさま) や漢字語 주저 [tʃudʒɔ] (躊躇) の疊語と思われる 주저 주저 [tʃudʒɔdʒudʒɔ] (しきりにためらうさま) などが朝鮮語研究会編 (1971) の擬声擬態語辞典に見出せるのも擬声擬態語の画定の難しさを物語っていると言ってよい。漢字語 조심 [tʃo:sim] (操心：気をつけること) の疊語 조심조심 [tʃo:simdʒosim] なども擬態語的なところがある。なお、一般に疊語形式になると擬声擬態語と感じられる傾向があることは注目してよい。また擬声擬態語には疊語形式を持ちうるものが多いことは事実であるけれども、疊語形式を持ちうるかどうか必ずしも擬声擬態語であるかどうかの判断の基準になるわけではない。擬態語的な音象徴語도 캄캄하다 [kʰamkʰamhada]/검검하다 [kʰɔmkʰɔmhada] (真っ暗だ) など、数が多い。擬声擬態語と一般語との境界は曖昧なものなのである。북북 [pukʰpukʰ] (ぼりぼり：頭などを掻くさま) などは擬声語と擬態語のいずれなのか区別に迷う例である。

1-3. 擬声擬態語に準ずる漢字語

朝鮮語のすべての語彙は、固有語(朝鮮固有の単語)・漢字語(日本語の漢語にあたる)・外来語(主として西欧語からの借用語)の三種に分けうるが、擬声擬態語に準ずる漢字語も多数存在している：

유유히/젖빛 구름이 흐르는/산 봉우리

[jujuhi tʃɔtʰpit kuruumi huɾuɾuɾun sanʰpoɾuri]

悠々と/乳色の雲が流れる/山の峯 (金容浩「五月の誘惑」)

밤은 새벽을 배고/침침히 깊어 간다!

[pamun sebjɔɾɯl pɛ:go tʃʰimtʃʰimhi kipʰɔganda]

夜は夜明けをはらみ/沈沈と更けてゆく (吳相淳「初夜」)

参考：春宵一刻直千金 花有清香月有陰 歌管樓臺人寂寂

鞦韆院落夜沈沈 (蘇軾「春夜詩」)

こうした漢字語は、寂寂하다 [tʃɔkʰtʃɔkʰhada] (寂しい) のように -하다 [hada] をとって形容詞に、また寂寂히 [tʃɔkʰtʃɔkʰhi] (寂しく)

のように -히 [hi] をとって副詞として用いられるのが普通である。他にも疊疊山中 [tʃʰəptʃʰəpʰsandʒun] や疊疊 [tʃʰəptʃʰəp] 하다 の疊疊 (山などが幾重にも重なっているさま)、坦坦大路 [tha:ntʰandero] の坦坦 (広く平らかなさま)、殷殷 [ɯnɯn] 하다 (砲声などが轟きわたるさま) や滿滿 [manman] 하다 (自信などが満ち溢れるさま) など擬態語的な漢字語は多いし、また頻繁 [pinbʌn] 하다・曖昧 [ɛ:me] 하다・潑刺 [pallal] 하다 など、元来擬態語起源とされるものも多い。こうした漢字語の存在は日本語と照らし合わせて非常に興味深い、以下では基本的に固有語におけるオノマトベについてのみ見てゆくことにする。

1-4. 擬声擬態語の語彙数

朝鮮語の擬声擬態語が何語あるかについては明確にしがたい。一つには上述の擬声擬態語の画定の問題があり、いま一つには擬声擬態語は一般語と異なり、話し手が自由に作れる許容度が大きいという問題があるからである。使用された語彙がその話し手のみの臨時的なオノマトベなのか、あるいは広く用いられる語彙なのかという問題を考えると、どこまでを朝鮮語の語彙とするかが非常に大きな問題となるのである。翻って辞書に何語登録されているかを考えるにしてもやはり擬声擬態語の画定の問題からは逃れられないし、辞書には現実にはほとんど用いられない語彙なども多く、実際の総数の決定は難しい。通時的な変遷も見逃せない。ただ、一応の目安としては、いくつかの数字をあげることができる。例えば、論者が調べたところでは、박용우 (1989) の朝鮮語分類辞典には 93 ページにわたって総計 3863 語の擬声擬態語が収録されている：

	擬声語 1104 語	
「形容擬態」 725 語		— 擬声擬態語 3863
「動作擬態」 2034 語	擬態語 2759 語	

あるいは Fündling (1985) によれば、朝鮮語研究会編 (1971) の擬声擬態語辞典には 3780 語、交替形の組を一つと考えると 2416 語があるという。菅野裕臣 (1986) は、延辺言語研究所編 (1982) には、擬声

語 2129・擬態語 6157 語、計 8286 語があるとしている。ただし同一の単語が多義的な場合には重複してあげられている。青山秀夫 (1972)・(1977) では交替形の組を 1 語群と数え、擬声語は 394 語群、擬態語が 802 語群あるとされている。また青山秀夫は延べ 6600 語を辞典から得たとしている (朝鮮学会発表 1989)。朴基完 (1984) にはハングル学会による『새한글사전 (新ハングル辞典)』(1973) から 1950 の語彙が上げられている。Fabre (1970) は 3664 語を辞典や文学作品から拾い出したという。許卿姫 (1989) は『옛센스韓日辞典』には 2348 語があるとしている。結局、2000 から 8000、おおむね 4000 といった概数になってしまうが、かなりの数になることだけは間違いない。なお、擬声語はおおむねどの言語でもある程度存在するようであるが、朝鮮語の擬態語の豊富さは特筆すべきであろう。いずれにせよ擬声擬態語の語彙数の現実的な数字を上げるためには大規模な語彙使用調査が不可欠であって、今後の擬声擬態語研究は辞書を基礎にした研究ではなく、そうした現実の語彙使用調査から出発せねばなるまい⁽²⁾。

2. 擬声擬態語の音と形式

2-1. 母 音

擬声擬態語を構成する音の特徴を見ると、八つある単母音のうち、ト [a]・ㄷ [ɔ]・ㅡ [u] の頻度が高く、ㅓ [e] や ㅕ [ɛ] の頻度は圧倒的に少ない。日本語でもエ段の母音を持つ擬声擬態語が少ないことに照らして興味深い。

出現頻度の調査ではないが、朴基完 (1984) は、1950 語の擬声擬態語のうち、それぞれの母音を単語の末音節に持つ語彙が何語あるかを調査した。それによって百分率を算出してみると次のとおりである：

- ① ㄷ [ɔ] 465 (23.9%) ② ト [a] 430 (22.1%) ③ ㅡ [u] 417 (21.4%)
- ④ ㅓ [e] 311 (16.0%) ⑤ ㅣ [i] 166 (8.5%) ⑥ ㅗ [o] 101 (5.2%)
- ⑦ ㅜ [ɛ] 32 (1.6%) ⑧ ㅑ [e] 25 (1.3%) ⑨ ㅓ [wi] 3 (0.2%)

また許卿姫 (1989) によると語末で① ㄷ [ɔ] ② ㅡ [u] ③ ト [a] ④ ㅓ [e] ⑤ ㅣ [i] ⑥ ㅗ [o] の順となっていて朴基完 (1984) とおおむね一致

している。同じく許卿姫(1989)によれば語頭では①ㅏ [a] ②ㅑ [ɔ] ③ㅓ [u] ④ㅜ [o] ⑤ㅣ [i] とされており、母音ㅡ [w] は語頭では少ないことがわかる。

朝鮮語研究会編(1971)の擬声擬態語辞典の50%の語彙を対象にしたという Fündling(1985)の調査によれば、それらの語彙の全音節に占める母音の比率は次のとおりで、①位から③位までのㅏ [a]・ㅡ [w]・ㅑ [ɔ] の合計を見ると56.88%という高率である：

- ①ㅏ [a] (19.89%) ②ㅡ [w] (18.51%) ③ㅑ [ɔ] (18.48%)
 ④ㅓ [u] (15.01%) ⑤ㅣ [i] (10.89%) ⑥ㅜ [o] (8.17%)
 ⑦ㅓ [e] (3.65%) ⑧ㅕ [e] (1.59%) ⑨ㅗ [wa] (1.33%)

擬声擬態語の音的特徴を見るには、これまではあまり行なわれてこなかったが、朝鮮語一般の音的特徴と対比して観察することが必要である。朝鮮語の固有語一般としては、유재원・역음(1985)によると、それに収録した語彙を構成する母音は①ㅏ [a] ②ㅣ [i] ③ㅑ [ɔ] ④ㅓ [u] ⑤ㅜ [o] ⑥ㅡ [w] ⑦ㅓ [e]……という順になっている。開音節で終わる固有語の語末の母音だけ見ると①ㅣ [i] ②ㅏ [a] ③ㅓ [e] ④ㅓ [u] ⑤ㅜ [o] ⑥ㅕ [e] ⑦ㅡ [w]……の順である。固有語のみならず漢字語・外来語を含めた短編小説のテキストについて、論者が簡単に調査したところでは全母音字母の出現頻度のうち、母音は：

- ①ㅏ [a] (25.4%) ②ㅡ [w] (17.6%) ③ㅣ [i] (12.5%)
 ④ㅑ [ɔ] (11.8%) ⑤ㅜ [o] (8.8%) ⑥ㅓ [u] (5.9%)
 ⑦ㅓ [e] (2.6%)

となっている。結局、擬声擬態語の母音の特徴としては：

- 1) 一般語同様、ㅏ [a]・ㅡ [w]・ㅑ [ɔ] が多く、ㅕ [e]・ㅓ [e] が少ない
- 2) 一般語に比して、擬声擬態語ではㅣ [i] の頻度が相対的に低いと言える。後述する母音調和の観点からは、母音ㅣ [i] はいわば確固たるペアを持たない母音であって、そのことが擬声擬態語でㅣ [i] の頻度が相対的に低い原因の一つかもしれない。

なお、朝鮮語の長母音は基本的に第一音節にのみ立ちうるものであるにもかかわらず、擬声擬態語や音象徴語では強調されるとしばしば

第二音節以降でも長母音化する。語末ではこの傾向が顕著である：

살그머니 [salguməni]~[salgumə:ni] (こっそり)

빙그레 [pingwure]~[pingwure:] (にっこり：笑うさま)

비딱하게 [piʔta^khage]~[piʔta:^khage] (斜めに)

2-2. 子 音

母音と同様に Fündling (1985) によって擬声擬態語の子音を見てみる。子音ゼロの場合も含めた音節の頭音は次のとおりである：

① ㄹ [r] (11.31%) ② ㄱ [k] (10.91%) ③ ㄷ [t] (10.68%)

④ ゼロ (8.79%) ⑤ ㅌ [tʃ] (8.73%) ⑥ ㅅ [s] (7.05%)

⑦ ㅂ [p] (6.62%) ⑧ ㅍ [ʔk] (5.78%) ⑨ ㅊ [ʔt] (3.99%)

⑩ ㅍ [ʔtʃ] (3.89%)

ㄹ [r] は語頭には立たないので必ず二音節目以降に出るにもかかわらず頻度は高い。朝鮮語学で平音と呼ぶ [k] [t] [tʃ] [s] [p] の頻度が一般に高く、濃音 [ʔk] [ʔtʃ] [ʔt] がこれにつぎ、激音(帯気音)は低い。

一般語を見ると、論者の簡単な調査で音節の頭音の字母は：

① ゼロ (27.9%) ② ㄱ [k] (13.6%) ③ ㅅ [s] (9.9%)

④ ㄷ [t] (8.8%) ⑤ ㄴ [n] (8.5%) ⑥ ㄹ [r] (7.0%)

⑦ ㅌ [tʃ] (5.9%) ⑧ ㅎ [h] (5.5%) ⑨ ㅂ [p] (4.8%)

⑩ ㅁ [m] (3.3%)

となっており、擬声語擬態語とはやや様相を異にしている。擬声擬態語の音節の頭音の特徴をまとめると：

- 1) 一般語に比べ頭子音ゼロの音節が少ない
- 2) 一般語に比べ ㄹ [r] が多い
- 3) 一般語に比べ ㄴ [n]・ㅅ [s]・ㅎ [h] が少ない
- 4) 一般語に比べ濃音が多い
- 5) 一般語同様子音では ㄱ [k] が最も多い

ということが言えよう。母音に比べ子音は一般語と擬声擬態語との違いが顕著である。なお、語頭が ㄴ [n] の擬声語はほとんどない。냐옹 [njaon] (にゃあお：猫の鳴き声) と 냐냐 [njamnjam] (もぐもぐ：子供などがおいしそうに食べるさま) ぐらいであるが後者は擬態語的

である。語頭が ㄹ [m] の擬声語も 맴맴 [mɛ:mmem] (みーんみん：蟬の鳴き声)・멍멍 [mɔŋmɔŋ] (わんわん：犬の鳴き声)・매 [mɛ:] (めええ：山羊の鳴き声) など数えるほどしかない。

擬声擬態語の音節末音は Fündling (1985) によれば次のとおり：

- ①母音 (34.87%) ②ㄱ [k] (19.65%) ③ㄹ [l] (18.67%)
 ④ㅇ [ŋ] (13.89%) ⑤ㄴ [n] (5.01%) ⑥ㅁ [m] (3.95%)
 ⑦ㄷ [t] (3.23%) ⑧ㅂ [p] (0.75%)

開音節を除けば、音節末に立ちうる7種の子音のうち、ㄱ [k] だけで 30.18%，軟口蓋音の ㄱ [k] と ㅇ [ŋ] で 51.48%，さらに ㄹ [l] まで合わせると子音の 80.15% に達する。

なお擬声語では音節末音に ㄹ [m] が立つのは 텨텨 [tɔmbɔŋ] (ざぶん：水に入って行く音) など、基本的に ㅂ [b] の前のみである。また音節末に ㅂ [p] が立つことはほとんどない。擬声語では ㄹ [l] が音節末音となるのは ㅈㅈ [ʧʌlʧʌl] (ちっちっ：舌打ちする音) など音節頭音が ㄱ [k]・ㄲ [ʔk]・ㅋ [kʰ], ㄷ [t]・ㄸ [ʔt]・ㅌ [tʰ], ㅈ [tʃ]・ㅉ [ʔtʃ] と母音の場合のみ、即ち k/t/tʃ-V-l の組み合わせに限られる。

一般語の場合の音節末音字母の出現頻度は次のとおり⁽³⁾：

- ①ゼロ (48.2%) ②ㄴ [n] (16.9%) ③ㄹ [l] (12.1%)
 ④ㄱ [k] (4.8%) ⑤ㅁ [ʔs/ (3.7%) ⑥ㅂ [ʔs/ (2.9%)
 ⑦ㅇ [ŋ] (2.6%) ⑧ㅁ [m] (1.8%)

ここから擬声擬態語の音節末音の特徴は次のように要約できよう：

- 1) 一般語に比べ ㄱ [k]・ㅇ [ŋ] が非常に多い
- 2) 一般語に比べ ㄴ [n] や ㄷ/ㅌ [t] が少ない
- 3) 調音点が後ろの音ほど多い

2-3. 音節構造の型

朝鮮語の基本的な音節の構造は CV および CVC であるが、擬声擬態語も同様である。Fündling (1985) は 65.13% を占める CVC の構造の音節を擬声擬態語の「理想的な音節」と呼んでいる。前節で見たように一般語では CVC の比率がより低くなり、CV が増える。

擬声擬態語を音節数から見れば一音節語や三音節語に比べ二音節語・四音節語が圧倒的に多い。また疊語形式をとるものが多いので二音節語・四音節語・六音節語といった偶数音節語が多くなる。ほとんどの一音節語は疊語形式によって二音節語となりうるようである。また疊語形式でしか用いられないものもある。

疊語形式を中心に主要なタイプを見ると次のとおりである。疊語形式の一つの単位を A で示し、同じ音の繰り返しを AA, 似た音の繰り返しを AA' で表わす。また A と異なるものを B, AB いずれとも異なるものは C で示す：

①一音節語：

- A [-k] 탁 [thak] (ことっ：軽いものがぶつかる音)
 꺾 [ʔkwak] (ぎゅっ：しっかりつかむさま)
 [-ŋ] 쿵 [khuŋ] (どしん：重いものがぶつかる音)
 쾅 [phɪŋ] (くらっ：眩暈がするさま)
 [-t] 툇 [ʔtʰu:] (ちっ：舌打ちの音)
 [-V] ㅁ [ʔtu:] (ぽー：汽笛の音)

一音節語の音節末音を見ると、擬声語・擬態語を問わず軟口蓋音 ㄱ [k]・ㅇ [ŋ] がほとんどで、開音節のものは擬声語に少数があるのみ、擬態語には見られない。ㄴ [n] も例外的で、ㄹ [l]・ㅁ [m]・ㅂ [p]・ㅅ [s] など基本的にはないと考えてよい。音節末音中三位を占める ㄱ [k] も見当たらないのは興味深い。ちなみに日本語でも「どん」「ばん」など二拍の単語では「ん」で終わるものが多い。なお、これから見るとおり、一音節語に現われた軟口蓋音の優位はすべての擬声擬態語に貫徹している。

音節末音が基本的に ㄱ [k]・ㅇ [ŋ] に限られるので、一音節語だと当然組み合わせの数も限られ、語彙数は少ない。例えば 박용수 (1989) の辞典に収録されている一音節語を観察すると次のとおりである：

音節末音	擬 声	形容擬態	動作擬態	計
ㄱ [k]	37	8	44	89 (56.3%)
ㅇ [ŋ]	45	1	7	53 (33.5%)
母音	16	0	0	16 (10.1%)
計	98	9	51	158語(100.0%)

この辞典では 1104 語の擬声語のうち 8.9%, 2759 語の擬態語のうち 2.2%, 全擬声擬態語 3863 語の 4.1% が一音節語である。許卿姫 (1989) から割り出しても全 2348 語中 99 語, 4.2% であるから比率はほぼ一致する。

一音節語の擬声語は長母音でないかぎりほとんどが瞬間的な音を表すもので, 特に音節末音が ㄱ [k] のものには音が急に停止する印象が顕著である。音節末音が ㄹ [ɾ] になると音にやや余韻が残るなど, 音の消えかたが ㄱ [k] より鈍くなる。

②二音節語:

AA	[-k-k]	짹짹 [ʔtʃɛkʔtʃɛk]	(ちいちい: すずめの鳴き声)
	[-l-l]	뒹뒹 [tɔldɔl]	(ぶるぶる: ふるえるさま)
	[-ŋ-ŋ]	퉁퉁 [tʰuŋtʰuŋ]	(ぱんぱん: 腫れたり太るさま)
	[-p-p]	짹짹 [ʔtʃapʔtʃap]	(びちゃびちゃ: 食べる音)
	[-m-m]	남남 [njamnjam]	(もぐもぐ: 子供などがおいしそうに食べるさま)
	[-V-V]	히히 [hihi]	(ひひ: きまり悪そうに軽く笑うさま)
AA'	[-k-k]	쓱쓱 [ʔsuukʔsak]	(さっ: 素速く行いうさま)
AB	[-k-k]	폭썩 [phokʔsak]	(ずずっ: 崩れ落ちるさま)
	[-l-k]	찰작 [tʃʰalkʰak]	(カシャツ: カメラのシャッター音)
	[-V-k]	와락 [warak]	(ぐいっ: 急に引っ張るさま)
	[-m-k]	감썩 [ʔkamʔpak]	(ちかつ, ぱちくり: 光やまばたき)
	[-n-k]	잔뜩 [tʃanʔtuuk]	(うんと, たっぶり)
	[-p-k]	덩석 [tɔpʔsɔk]	(むんず: つかむさま)
	[-ŋ-ŋ]	퐁덩 [phuŋdɔŋ]	(どぼん: 大きなものが水に落ちる音)
	[-l-ŋ]	흘렁 [tʃʰullɔŋ]	(どっぶん: 水がゆれる音)
	[-m-ŋ]	덩병 [tɔmbɔŋ]	(どぶん: 水に落ちる音)
	[-V-ŋ]	야옹 [jaon]	(にゃおん: 猫の鳴き声)

[-V-l]	끼끌 [ʔkweʔkol]	(ほーほけきょ：鷺の鳴き声)
[-l-m]	힐끔 [hilʔkuɪm]	(じろっ：横目で窺い見るさま)
[-l-n]	발끈 [palʔkuɪn]	(かっと：腹を立てるさま)
[-V-n]	사뿐 [saʔpun]	(そっと：静かに踏み出すさま)
[-ŋ-t]	방긔 [paŋɡuɾt]	(にこっ：ほほえむさま)
[-l-t]	힐끗 [hilʔkuɾt]	(ちらっ：横目でにらむさま)
[-n-t]	언뜻 [ɔnʔtuɾt]	(ちらりと：一見するさま)
[-V-t]	사똥 [saʔpuɾt]	(そっと：静かに歩くさま)
[-m-V]	음매 [uɪmme:]	(もー：牛の鳴き声)

二音節語になると音節末音で軟口蓋音の他に ㄹ [l] の頻度が高くなり，他にも ㄴ [n]・ㄹ [m]・ㄹ [p]・ㄴ [n] などが少しずつ用いられるようになる．AA ではほとんどが [-k-k]・[-l-l]・[-ŋ-ŋ] の型で [-p-p] や [-m-m] は例外的．AA' は非常に少ない．なお [-l-k] が特に擬声語に多い．また二つの終声の継起する順序では，調音点が前の音が前に立ちやすく，後ろの音ほど後ろに立ちやすい傾向がある．

③三音節語：

AAA	따따따 [ʔtaʔtaʔta]	(パパパ：ラップの音)
AA'A"	주루룩 [tʃururu ^k]	(すーっ：細く水の流れるさま)
AA'B	두둥실 [tuduŋʃil]	(ぽっかり：月や船が浮かぶさま)
AAB	히히덕 [hihidɔ ^k]	(くすくす：笑う様子)
ABA'	달가닥 [talɡadak]	(かたん：軽い物がぶつかる音)
ABB	부시시 [puʃiʃi]	(おもむろに起き上がるさま)
ABB'	파당탕 [ʔkwadɑŋ th ɑŋ]	(どすん：倒れる音)
ABC	땡그랑 [ʔteŋɡuɾɑŋ]	(からん：鐘の音)

三音節語では ABC が多い．ここでも調音点が後ろの音ほど後ろになりやすいという終声の継起する順序の大きな傾向は変わらない．また三音節語になると瞬間的な音や様子を表すものは少なくなり，持続的な音や様子を表すものが次第に増えてくる．

④四音節語：

ABAB (=AA)

[-k-k]	속닥속닥 [so ^k ʔtakʔso ^k ʔtak]	(ひそひそ：ささやくさま)
--------	--	---------------

- [-l-k] 팔딱팔딱 [pʰalʔtakpʰalʔtak] (びょんびょん：小さな動物や子供が跳んでゆくさま)
- [-m-k] 감빻감빻 [ʔkamʔpakʔkamʔpak] (ちかちか：明かりがまたたいたり目をばちくりさせるさま)
- [-n-k] 반짝반짝 [panʔtʃakʔpanʔtʃak] (きらきら：小さく光るさま)
- [-V-k] 뚜벅뚜벅 [ʔtubəkʔtubək] (人や大きな動物が偉そうに歩くさま)
- [-ŋ-ŋ] 강충강충 [ʔkaŋtʃʰuŋʔkaŋtʃʰuŋ] (びょんびょん：兎が跳ねるさま)
- [-l-ŋ] 찰방찰방 [tʃʰalbaŋtʃʰalbaŋ] (ばちゃばちゃ：水遊びなどの水の音)
- [-V-ŋ] 그렁그렁 [kʷrəŋgʷrəŋ] (なみなみ：涙や液体が溢れそうになるさま)
- [-p-l] 굽실굽실 [kupʔʃilɡupʔʃil] (ぺこぺこ：へつらって腰を屈めるさま)
- [-ŋ-l] 싱글싱글 [ʃiŋɡʷɐlʃiŋɡʷɐl] (にこにこ：笑うさま)
- [-m-l] 넘실넘실 [nəmʃilləmʃil] (うねうね：波打つさま)
- [-V-l] 구불구불 [kubulɡubul] (くねくね：曲がりくねるさま)
- [-n-l] 반들반들 [pandʷɐlbandʷɐl] (つるつる：艶があって滑らかなさま)
- [-ŋ-m] 성큼성큼 [səŋkʰuumsəŋkʰuum] (のっしのっし：大股で歩くさま)
- [-l-m] 살금살금 [salɡuumsalɡuum] (こそこそ：人に悟られないように歩いたり這ったりするさま)
- [-V-m] 더듬더듬 [təduumdəduum] (つかえつかえ：何度もつかえながら話したり手でたどるさま)
- [-k-n] 폭신평신평 [pʰukʔʃinpʰukʔʃin] (ふかふか：ふとんやソファが柔らかいさま)
- [-l-n] 슬근슬근 [sulɡuunsulɡuun] (ぎこぎこ：鋸の音)
- [-V-n] 수근수근 [sugunsugun] (ひそひそ：低い声で話すさま)

[-ŋ-t] 방긋방긋 [paŋgurtʔpaŋgurtʔ] (にこにこ：ほほえむさま)

[-n-t] 반듯반듯 [paŋdurtʔpaŋdurtʔ] (ぴんと：まっすぐ整って
いるさま)

[-V-t] 느릿느릿 [nurinnuriʔ] (のっそり：ゆっくりした動作)

[-ŋ-V] 뭉게뭉게 [muŋgemuŋge] (もくもく：雲が立ち昇るさ
ま)

[-l-V] 설레설레 [sɔllesɔlle] (いやいやして首を振るさま)

AA'AA' (=AA)

[-k-k] 속삭속삭 [sokʔsakʔsokʔsakʔ] (ひそひそ：ささやくさま)

ABA'B' (=AA')

들쭉날쭉 [tulʔtʃuŋnalʔtʃukʔ] (でこぼこ：面や線状のも
のに凹凸があるさま)

울긋불긋 [ulguʔtʔpulguʔtʔ] (色とりどり：多くの色がき
れいに点々と混じっているさま)

웅기웅기 [oŋgidʒoŋgi] (ぼつぼつ：小さなものが集まっ
ているさま)

ABCB (=AA')

뒤죽박죽 [twidʒukʔpakʔtʃukʔ] (ごちゃごちゃ：混ざるさ
ま)

ABCB' (=AB)

움작달작 [omʔtʃakʔtalʔsakʔ] (微動するようす)

ABCC (=AB)

뱅그르르 [pɛŋgʷurʷurʷu] (くるるっ：回るさま)

ABB'C (=AB)

왁자지껄 [wakʔtʃadʒiʔkɔl] (가야가야：騒々しいさま)

ABCD 물끄러미 [mulʔkwɔrɔmi] (ぼんやり：見るさま)

어리둥절 [ɔriduŋdʒɔl] (ぼけっと：面食らうさま)

四音節語の ABAB (=AA) の型がすべての疊語形式の中でも圧倒的に多く、また豊富な音を取りうるので最も安定した形と言ってよい。ただしどんな音でも構わないというわけではなく、語末は二音節語と同様 [-k]・[-l]・[-ŋ] が多い。音節末音の組み合わせも多くは上に

列挙した型に限られている。擬声語は三音節までのものが多く、四音節語以上になると擬声語が相対的に少なくなって擬態語の比重が大きくなる。擬声擬態語のうち音節末に [-p]・[-m] を持つものの多くは擬態語である。なお日本語でも ABAB の型が非常に多い。

⑤五音節語：

(AB)

우르릉-쿵쿵 [uruɾuŋkʰwaŋkʰwaŋ] (ごろごろどーん：落雷の音)

우지끈-똑딱 [udʒiʔkʷɐnʔtuʔkʰtaʔk] (ばきばき：鈍く折れ壊れる音)

후루룩-쩍쩍 [huruɾuʔtʃɔpʔtʃɔp] (ずるずるびちゃっ：うどんなどをすすって品なく食べる音)

五音節語は極めて数が限られてくる。許卿姫 (1989) によると『엠편韓日辞典』には 14 語, 0.6% しかないという。ただし本稿の最初の例は同辞典にはない。Fabre (1970) は 8 語をあげている。박용수 (1989) には 딱다그르르 [ʔtakʰʔtaguɾuɾuɾu] (ころころ：堅いものがぶつかって転がる音) の交替形 4 語と [udʒiʔkʷɐnʔtuʔkʰtaʔk] の交替形 2 語, 計 6 語の擬声語しかない。五音節語は二つの語根を結合したものしかないようである。語根の境界を「-」で示しておいた。

⑥六音節語：

ABC ABC (=AA)

꼼지락꼼지락 [ʔkomdʒirakʰʔkomdʒirakʰ] (ぐずぐず：動作がのろいさま)

어슬렁어슬렁 [ɔsuɾɭɔŋɔsuɾɭɔŋ] (のそりのそり：虎などが歩くさま)

두리번두리번 [tuɾibɔnduɾibɔn] (きょろきょろ：見回すさま)

주저리주저리 [ʈʃudʒɔɾidʒudʒɔɾi] (たわわに：果物が鈴なりになるさま)

ABC A'BC (=AA')

곤드레만드레 [kondʷɾɛmandʷɾɛ] (ぐてんぐてん：酔った様子)

五音節語よりは数が多くなる。許卿姫 (1989) では 216 語とされる。

ほとんどが語末は [-k]・[-ŋ] となり, [-l] は激減する. 大部分が AB CABC, つまり三音節語を疊語にした AA に還元できる型である.

⑦八音節語:

ABA'D ABA'D (=AA)

헐레벌떡헐레벌떡 [hɒllebɒlʔtɔkkhɒllebɒlʔtɔk]

(ぜいぜい: 息を切らして走るさま)

AABBAABB (=AA)

치치폭폭치치폭폭 [tʃhiktʃhikphokphoktʃhiktʃhikphokphok]

(シュッシュッポッポ: 汽車の音)

八音節語は基本的には四音節語を疊語にした AA という型に還元できるものしかなさそうである. 許卿姫 (1989) によると 5 語, Fabre (1970) では 3 語とされる. 八音節語になると 1 単語なのか 2 単語なのか区別しにくくなる.

日本語でも「ホーホケキョ」のように長い音節を持つものは少ないが, 朝鮮語でも一般には 5 音節以上のものは見出すのが難しくなる. 数少ない五音節語も, ABCDE というような形式のものは見当たらず, 基本的には AB のように二つの語根が結合したものとなっている. 六音節語は五音節語に比べかなり数が多いけれども, やはりほとんどが AA の疊語形式である. 八音節語になると実際に用いられるものは非常に少なくなり, あったとしても AA の形式である. 七音節語は見いだせない. 結局一つの語根としては 4 音節までということになるろう.

菅野裕臣 (1986) も指摘するように, AA の疊語形式の多くは継続性・多回性を表し, AA' はしばしば多様性を表す:

A 땡 [ʔtɛŋ] (かあん: 鐘が 1 回鳴る音)

AA 땡땡 [ʔtɛŋʔtɛŋ] (かんかん: 鐘が複数回鳴る音)

AA' 응기종기 [ongidzonggi] (ぼつぼつ: 小さなものが集まっているさま)

3. 擬声擬態語の音と意味

3-1. 母音の交替と母音調和

日本語の korokoro/karakara//gorogoro/garagara のような母音と子音の交替は朝鮮語の擬声擬態語においても極めて生産的である。

母音の交替においては特に 陽母音/陰母音の交替 が特徴的で、おおむね次のような意味上の傾向を認めることができると言われている：

陽母音 ㅏ [a]・ㅗ [o]：小・少・弱・狭・薄・明・粗・美・善

陰母音 ㅓ [ɔ]・ㅜ [u]：大・多・強・広・厚・暗・密・醜・悪

例えば陽母音 ㅏ [a] を用いた 깔깔 [ʔkalʔkal] は主に若い娘や子供などの明るい笑い声を表し、陰母音 ㅓ [ɔ] を用いた 꺅꺅 [ʔkɔlʔkɔl] は年配の男性の笑い声を表すのに用いられる：

내가 당황하는 모습을 보고 애들은 깔깔 웃었습니다.

私が慌てる様子を見て子供たちはきゃっきゃと笑いました。

[ʔkalʔkal]

할아버지는 제 머리를 쓰다듬으시며 꺅꺅 웃으셨습니다.

おじいさんは私の頭を撫でながらはははとお笑いになりました。

[ʔkɔlʔkɔl]

また陽母音 ㅗ [o] による 쿨쿨 [kʰolkʰol] は子供や小さな動物などが寝息を立ててかわいらしく眠るさまであり、陰母音 ㅜ [u] の 쿨쿨 [kʰulkʰul] は大きな動物や大人が鼻息をたてて眠るさまとなる：

엄마 품에 안기자 아기는 잠을 쿨쿨 자기 시작했습니다.

母さんの胸に抱かれると赤ん坊はすやすや眠りはじめました。

[kʰolkʰol]

오빠는 피곤해서 쿨쿨 자고 있는 모양이다.

兄さんは疲れてぐうぐう寝ているようだ。

[kʰulkʰul]

程度の差のみならず快/不快の対立が鮮明に現われることも多い：

그 단비는 메마른 땅을 축축하게 적셔 주었다.

その恵みの雨はひからびた土地をしっとりと湿らせてくれた。

[tʃʰoktʃʰokkʰage]

땀을 너무 많이 흘려서 옷이 다 축축하게 젖었어요.

汗をあまりにもたくさんかいたので服がぐっしょり濡れました。

[tʰuktʰukʰhage]

朝鮮語には1単語内に陽母音と陰母音が共存しない母音調和が存在した。ハングルが作られた15世紀にはかなり明確であったが、現代語においては用言の活用語基形成における最後に残った母音調和さえ既に崩れかかっている。しかし上の例などでは陽母音と陰母音が混在した 갈걸 [ʔkalʔkəl] などという形が存在しないことなどをはじめ、擬声擬態語においては、母音調和が一定に残っていると言える：

陽/陰

말랑말랑 [mallanmallan] (ふわふわ：まりやマシュマロのように弾力があって柔らかいさま)

몰랑몰랑 [mollanmollan] (ふわふわ：できたての餅などのように柔らかいさま)

/물렁물렁 [mulləŋmulləŋ] (ふにゃふにゃ：空気の抜けたボールなどの柔らかいさま)

골각골각 [ʔkolʔkakʔkolʔkak]/꿀꺽꿀꺽 [ʔkulʔkəkʔkulʔkək]

(ごぼごぼ：溺れて水を飲み込む音)/(ごくごく：水を飲み込む音)

ただしすべての擬声擬態語で陽母音と陰母音が共存しないというわけではない。

ㅏ [a]/ㅓ [ɔ] および ㅜ [u]/ㅡ [ɯ] という陽母音/陰母音の対立だけでなく、次のような母音の対立もしばしば見られる：

ㅏ [a]/ㅓ [ɔ]/ㅣ [i]

방긋 [paŋɡwtʰ] (にこっ：幼児などのほほえむさま)

뽀긋 [pɔŋɡwtʰ] (にこっ：子供などのほほえむさま)

빙긋 [piŋɡwtʰ] (にやっ：ごまかし笑いなどのさま)

ㅏ [a]/ㅡ [ɯ]

살며시 [salmjɔʃi]

나와 눈이 마주치자 그녀는 살며시 웃어 보였다.

私と目が合うと彼女はそっと笑ってみせた。

슬며시 [swulmjɔʃi]

그는 나를 보자 슬며시 몸을 감추었다.

彼は私を見るやそつと身を隠した。

담뽕 [tamʔpuk]/듬뽕 [tʰumʔpuk] (たっぷり：盛るさま)

ㅏ [a]/ㅡ [u]/ㅣ [ε]

날름 [nallum]/눌름 [nullum]/넌름 [nellum] (べろり：舌を出すさま)

ㅣ [ε]/ㅣ [i]

뱅 [pɛ:ŋ]/빙 [pi:ŋ] (ぐるり：回るさま)

매끈매끈 [mɛʔkʷɛnmɛʔkʷɛn]/미끈미끈 [miʔkʷɛnmiʔkʷɛn]

(すべすべ：肌などがすべらかなさま)/(ぬるぬる：鰻などが)

생글생글 [sɛŋgʷɛlsɛŋgʷɛl]/싱글싱글 [ʃɛŋgʷɛlʃɛŋgʷɛl]

(にこにこ：女の子などが笑うさま)/(にこにこ：男が笑うさま)

母音交替については Flak (1958) が多くの型をあげている。

3-2. 子音の交替

子音では次のような平音/濃音/激音の交替が特徴的である：

뱅뱅 [pɛŋbɛŋ]/뽕뽕 [ʔpɛŋʔpɛŋ]/펑펑 [pʰɛŋpʰɛŋ] (くるくる：回るさま)

上の例では平音 ㅏ [p]/濃音 ㅑ [ʔp]/激音 ㅑ [pʰ] の交替となっており、一般にこの順で意味がより強く、あるいは激しくなると言われる。しかし次の例のように 濃音/激音の交替が程度の強弱というより質的な差をもたらしているような例も多い：

똑똑 [ʔtokʔtok] (とんとん：戸などを軽くノックするようなややかたい音)

톡톡 [thokthok] (とんとん：戸などを軽く指先でたたくような、あるいは人の肩をたたくようなやわらかい音)

꾹꾹 [ʔkukʔkuk] (ぎゅうぎゅう：上から下に押さえ付けるさま)

쿵쿵 [kʰukʰuk] (ぐっぐっ：指や棒などで人などを突くさま)

濃音はしばしばかたく密で鋭い印象を与え、激音は鈍く激しい印象を与える。

なお、すべての擬声擬態語が平音/濃音/激音の交替形を持っているわけではなく、いずれかが欠けているのが普通である。特に擬声語のうち動物の鳴き声などは交替形のないものも多い。

また次のような子音の交替もある：

ㄷ [t]・ㄷ [ʔt]・ㅌ [tʰ]/ㅌ [tʰ]・ㅌ [ʔtʰ]・ㅌ [tʰ]

딱 [ʔta:k] (ぴったり, かっきり：合致するさま)

내 몸에 딱 맞는 양복이 없었어요.

私の体にぴったり合う背広がありませんでした。

착 [tʰa:k] (ぴったり, べたっと：密着するさま)

너희 둘은 하루 종일 착 달라 붙어서 수다만 떨고 있구나!

あんたたち二人は一日中べったりくっついておしゃべりばかりしてるのね!

子音の交替では終声の交替も見られる：

ㄱ [k]/ㅇ [ŋ]

달가닥 [talɡadak^k]/달가당 [talɡadan] (かたん：ぶつかる音)

ㄷ [t]/ㅌ [tʰ]

방글방글 [paŋɡulbaŋɡul]/방긋방긋 [paŋɡutʰpaŋɡutʰ]

(にこにこ：笑うさま)

ㅁ [m]/ㅂ [p]

힐끔 [hilʔkwum]/힐끗 [hilʔkwutʰ] (じろっ：横目で窺い見るさま)

ㄴ [n]/ㄷ [t]

사뿐 [saʔpun]/사뽏 [saʔputʰ] (そっと：軽やかに踏むさま)

ㄱ [k]/ㄷ [t]

흑흑 [huɤkʰhuɤk]/호호 [huɤhuɤ]

(くっくっ：泣き声)/(ふふ：笑い声)

3-3. 母音と子音との関係

以上のような母音・子音の交替によって膨大な数の語形が得られる。例えば 달가닥 [talɡadak^k] (かたん) の変種は：

第一音節の頭音 [t] [ʔt] [tʰ] [tʰ] [ʔtʰ] [tʰ]

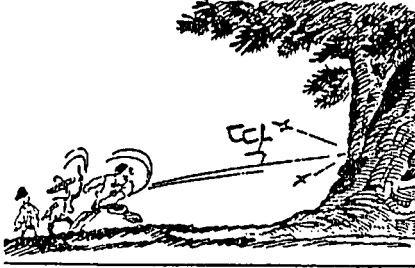
第二音節の頭音 [g] [ʔk] [kʰ]

第三音節の頭音 [d] [r]

第一第二第三音節の母音 [a] [ɔ]

第二音節の母音 [a] [u]

언덕 위에 올라오자 '노브'와 '딱부리'는 고목에
잘 던지기를 했다.



▲ [ʔtak]

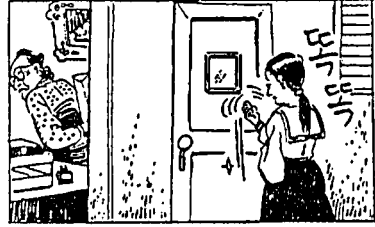
▼ [ʔtakʔtak]

딱부리너석 요게 제법
숨쉬가 들어 여사가
아니다.



▲ [ʔtaak]

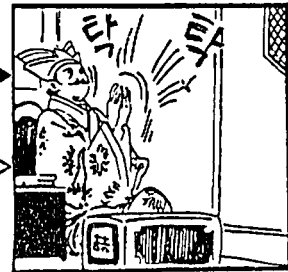
봄으락푸르락, 온몸을 맞면서 화를 낸다.
까닭 모르게 편지를 받는 학생이야말로 일대
재변이 아닐 수 없다. ▼ [ʔtokʔtok]



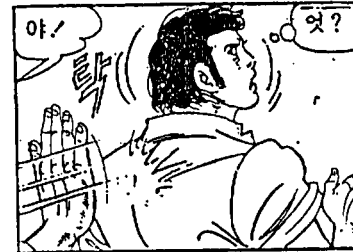
〈母音・子音の交替形〉
[ʔt]~[tʰ]
[a] [o] 陽~陰 [ɔ]

[tʰakʰtʰak]

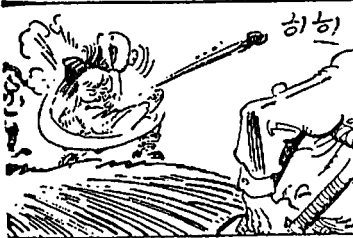
[tʰak] ▼



▼ [ʔtak]



이름 동안 있다면 좌측이고 싶다. 문득 주머니에
머두었던 아까의 그 세 번째 돌이 손에 잡혀



조리 일 39



◀ [ʔtak]



◀ [tʰak]

第三音節の末音 [k] [ŋ]

の変種を持つといった具合で 100 や 200 ではない。さらに 달각 [talga^k] という二音節語の変種やそれぞれの疊語形まで考えれば理論的には膨大な数となる。これらの変種をどの母語話者も同様に用いるわけではなく、話し手によっておのずから範囲は定まってくるけれども⁽⁴⁾、母語話者ならおおむねそれらのニュアンスを同じように感じ取るわけで、これらは潜在的な、あるいは可能性としての語彙群なのだと言えよう。

母音と子音の交替形がどのように用いられているか、前ページに漫画(房学基・高羽栄・이근철作)での例を示しておく。

3-4. おわりに

音と意味との関係のうちこれまで触れなかった点を青山秀夫(1977)も参照しながら簡単に要約すると次のような傾向があると言えよう：

1) 音節頭音

閉鎖音……衝撃・破裂

破擦音……破裂・波動

摩擦音 ㅅ [s]……摩擦・擦過・流動

流音 ㄹ [r]……響き・持続

2) 音節末音

閉鎖音……急な停止・急な変化

ㄱ [k]……急な停止・鋭い終結

ㄷ [t]……急な停止・軽い中止・鋭さ

ㅂ [p]……急な停止・屈折

鼻音……響き・持続

ㅇ [ŋ]……響き・余韻・漸次的な消滅

ㄴ [n]……軽い響き・弾みのある移行

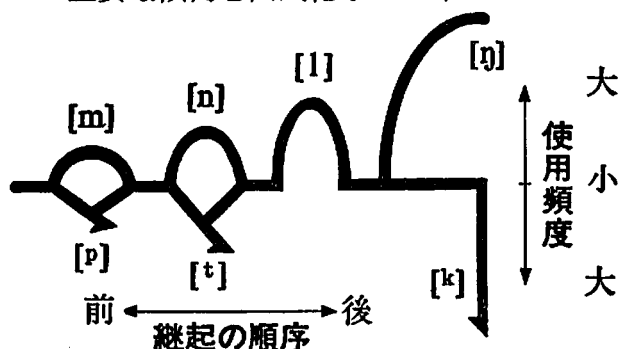
ㅁ [m]……緩行・停滞・閉鎖

流音 ㄹ [l]……弾み・揺れ・振動

母音……持続

また音節末音と意味のこうした関係、および一般語と異なる擬声擬

態語の＜音節末音法則＞とでも言うべき (1) 調音点が後ろの音ほど頻度が高い, (2) 調音点が後ろの音ほど継起順序は後ろに来る, という前述した二つの主要な傾向を図式化しておく:



第2章で述べた音節末音の組み合わせの型を見ると, 同じ型の単語は同じような意味を持つという傾向がある程度まで見出せるし, 第3章で触れたように音と意味にはおおよその対応関係が存在すると言える。

本稿で述べた擬声擬態語の音と形式の型, 音と意味との関係の型などについて, 例えば日本語など広く他の諸言語の擬声擬態語と対照してゆくなれば, あるいはそこに何らかの類型や傾向を見出すことができるかもしれない。そうした言わば＜オノマトペ類型論＞への展開には, 諸言語の広範な一次資料のテキストを分析し, 生きた擬声擬態語の現実を把握することが何よりも重要であろう。

注

(1) 本稿は 1990 年 3 月 30 日, 学習院大学言語共同研究所における発表の要旨の前半部分を整理したものである。音象徴語・派生・シンタックス・テキストと擬声擬態語との関連については同発表要旨を参照されたい。音声表記は『コスモス朝和辞典』(1988) による。朝鮮語の音声目録も同書を参照のこと。

(2) なお, 擬声擬態語の分類については, 연변언어연구소편 (延辺言語研究所編) (1982)・劉昌惇 (1980)・野間秀樹 (1985)・菅野裕臣 (1986) などのような語彙的な意味による分類のほか, 音による分類, 品詞や単語結合など文法と関連づけた分類も可能であろう。

(3) ここでは 산 [san]+이 [i] (「山が」の意) が [sa-ni] となるような場合、つまり音節末の子音が、次に母音が来ることによって次の音節の頭音として発音される場合でも音節末の子音として算定してある。また、これは音の数ではなく、字母の数の調査であって便宜的なものである。

(4) 朴基完 (1984) は 1950 語の擬声擬態語の最終音節における母音と子音の関係を調査し、次のような傾向を指摘した：①母音 ㅣ [i] は終声 ㄴ [n]・ㄷ [d]・ㄹ [l] とよく調和する。②母音 ㅡ [u] は終声 ㅁ [m]・ㄴ [n]・ㄷ [d]・ㄹ [l]・ㄱ [k] と、とりわけ ㄹ [l] とよく調和する。③母音 ㅏ [a]・ㅓ [o]・ㅜ [u] は終声 ㄱ [k]・ㅇ [ŋ] とよく調和する。それぞれ調音点の近いもの同士の相性が良いことがわかる。

参 考 文 献

●辞典等

金光海・編 (1987) 「類意語・反意語辞典」 한샘

南永信・역음 (1987) 「우리말 분류사전 (朝鮮語分類辞典)」 한강문화사

남영신・역음 (1989) 「우리말 분류사전 (朝鮮語分類辞典) 풀이말편」 한강문화사

박용수・역음 (1989) 「우리말 갈래사전 (朝鮮語分類辞典)」 한길사

유재원・역음 (1985) 「우리말 역순사전 (朝鮮語逆順辞典)」 정음사
연변언어연구소・편 (延辺言語研究所編) (1982) 「조선말 의성의태어분류사전 (朝鮮語擬声擬態語分類辞典)」 연변인민출판사

공업출판사 (1979; 1985) 「우리말 어휘 및 표현 (朝鮮語語彙および表現)」 공업출판사; 학우서방

조선어연구회・편 (朝鮮語研究会編) (1971) 「조선말의성의태어사전 (朝鮮語擬声擬態語辞典)」 학우서방

菅野裕臣・早川嘉春・志部昭平・浜田耕策・松原孝俊・野間秀樹・塩田今日子・伊藤英人・共編, 金周源・徐尚揆・浜之上幸・協力 「コスモス朝和辞典」白水社

● 論文等

- 박기완 (朴基完) (1984) “중내말에 있어서의 홀·닿소리 어울림——
음운변화의 요인으로서 (擬聲擬態語における母音・子音の調和——
音韻變化の要因として)” 연세대학교대학원 국어국문학과 석사논문
(延世大学校大学院国語国文学科修士論文)
- 梁昊淵 (1978) “韓國感覺語考” 『朝鮮學報』 第 86 輯
- 劉昌惇 (1980) 「語彙史研究」 二友出版社
- 許卿姬 (1989) “日・韓兩言語における音象徵語の比較対照研究” 『日
本語教育』 68 号
- 青山秀夫 (1972) “現代朝鮮語の擬聲語” 『朝鮮學報』 第 65 輯
- 青山秀夫 (1974) “朝鮮語の派生擬態語試考” 『朝鮮學報』 第 72 輯
- 青山秀夫 (1977) “朝鮮語の音声象徵” 『言語』 第 6 卷第 10 号 大修
館書店
- 梅田博之 (1976) 「韓國語 I・II」 東京三中堂
- 菅野裕臣 (1982) “朝鮮語の語彙 I 語彙および語構造” 「講座日本
語学 12」 明治書院
- 菅野裕臣 (1986) “オノマトペの響き <豊かな語彙と音>” 『言語』
第 15 卷第 11 号 大修館書店
- 野間秀樹 (1985) “朝鮮語の擬聲語・擬態語” 『基礎ハングル』 第 1 卷
第 8 号 三修社
- André Fabre (1970) “擬聲語・擬態語研究” 서울大學校大學院言語
學科言語學專攻석사논문 (ソウル大学校大学院修士論文)
- Dirk Fündling (1985) 「한국어 의성·의태어 연구 Koreanische
Onomatopöie」 塔出版社
- Г.А. Пак (1958) Морфологические особенности изобраите-
льных слов в корейском языке, 《Вопросы корейского и
китайского языкознания》, Ленинград
- Г.А. Пак (1961) Словообразование на базе образительных
слов, 《Корейский язык》, Москва

Onomatopoeia in the Modern Korean language

Hideki Noma

There are about 4000-8000 onomatopoetic words in the Modern Korean language. This paper discusses characteristics of onomatopoetic sound and syllabic structure of onomatopoetic words with special reference to patterns of reduplication.

What we call in this study the 'Law of Final Consonants' of onomatopoeia in Korean language can be expressed in the two following tendencies:

1) The frequency of use of final consonants increases by degrees in order of point of articulation (front to back). The order from least to most frequent is:

[p] [m] < [t] [n] < [l] < [k] [ŋ]

2) The order of consonants ending a syllable in words 2 or more syllables follows the above front to back pattern of points of articulation.

(東京外国語大学朝鮮語科講師)